

トップ > 医療・健康



九州・山口の医療ニュース

## 家族が自殺…心情つづる

[更新日時]2008年10月06日

自ら命を絶つ人が10年続けて3万人を超すなかで、残された家族もまた、堪え難い悲しみと自分を責める心の痛み、そして周囲の偏見にさらされて生きにくいこの世を生きている。連れ合いやわが子、親を失った人たちが心情をつづった「自殺で家族を亡くして 私たち遺族の物語」が刊行された。

### 遺族の文集刊行

リメンバー福岡など、自殺対策基本法にも盛り込まれた遺族支援に取り組む団体や個人でつくる全国自死遺族総合支援センターが編んだ。遺族18人の文章は、なぜ死を選ばねばならなかったのかを問い、悲嘆に暮れながらも、愛する人が存在した意味を見いだして生き抜こうという誠実な思いが詰まっている。



50代の女性は5年前、大学生の息子を亡くした。死にたいと打ち明けられても助けてあげられなかった自分に苦しみ、加えて、自殺を恥ずかしいこととして忘れてしまおうとする周りの空気もつらかった。

女性はいま「どんな風景にもどこかに必ず息子がいます…普段の生活の中でも、息子が私の中にいる、と頻繁に感じるができます」という。

そして「せめて、19年間精いっぱい駆け抜けていった男の子がここにいた、ということだけでも残したい、それは母親である私の残りの人生の課題ではないか、とやっと最近になって考えるようになりました」とつづる。そのためにも、わが子が苦しんだうつ病に悩む子どもや若い人の力になりたいと願っている。

官民で取り組む「自殺対策」は途方もなく思えるが、逝った人、残された人の生きように触れることで自らのこととしたい。三省堂刊。1500円(税別)。(編集委員・田川大介)

＝2008/10/06付 西日本新聞朝刊＝